婦人とみられる

第拾壹卷
第八號

フレーベル會

第拾壹卷第八號目次

○うるほひ

○異常兒童の話　ドクトル　富士川　游

○子供の色彩感覺に就いて（下）　文學士　菅原敎造

○園のをぐさ　後藤りん

○保育の實際

△唱歌の紹介　（甲賀ふじ子氏）

○机邊だより　倉橋惣三

△幼稚園の改良　（スタンレーホール氏）

子供の友一茶　倉橋生

フレーベル會規則

第一條　本會ハ幼兒保育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス

第二條　本會ハフレーベル會ト稱シ東京ニ置ク

第三條　會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼兒保育ニ篤志ナルモノニシテ會員ノ紹介ヲ經ベシ

第四條　會員ハ本會ノ經費トシテ一ケ月金拾錢ヲ醵出スベシ

第五條　令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルモノハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルベシ

第六條　本會ノ目的ヲ達センガ爲ニ左ノ事業ヲ行フ

一　總會　毎年四月廿一日之ヲ開キ保育ニ關スル演說、談話、保育參考品幼兒成績物展覽等　會務ノ報告　幹事ノ選擧等ヲナス

但シ會日ハ會長ノ意見ニヨリ之ヲ變更スルコトアルベシ

一　常會　毎年二月、六月、十二月ノ第二土曜日之ヲ開キ保育ニ關スル演說、談話、協議、實驗等ヲナス

一　組合會　會員中特ニ或ル事項ヲ研究セントスルモノヲ以テ組織ス

但シ別ニ組合規約ヲ定メテ會長ノ承認ヲ經ルモノトス

一　雜誌發行　毎月一回雜誌ヲ刊行シテ之ヲ會員ニ配布ス

一　前項ノ外本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件

第七條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク

會長　一人　會務ヲ總理ス

主幹　一人　會長ヲ補佐シテ會務ヲ掌理ス

幹事　若干人　會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス

評議員　若干人　重要ナル事件ニ關シ會長ノ諮詢ニ應ズ

第八條　會員中ヨリ推薦スルモノトス

第九條　主幹、幹事、評議員ハ會長ノ特選トス

第十條　本會ハ必要ニ應シ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ルルコトアルベシ

第十一條　此規則ハ會員三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラサレハ變更スルコトヲ得ス

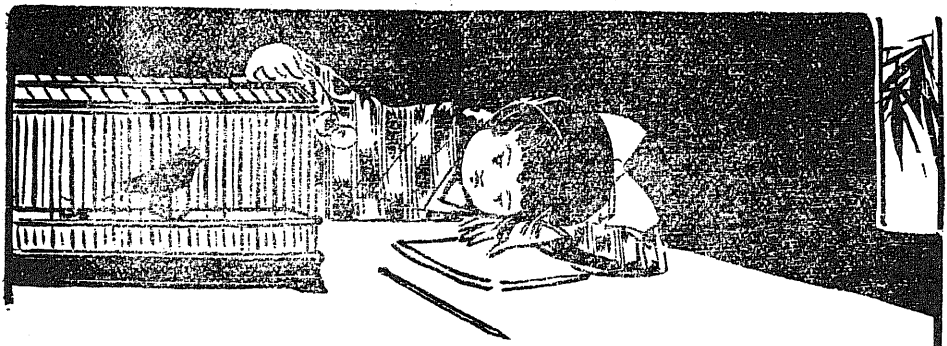
購讀の申込

（振替口座東京一七二六六番）

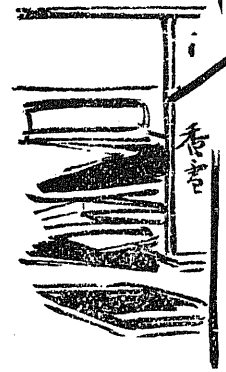
本誌を購讀なされたき方は會費一ケ月金十錢の割合で一ケ年分をまとめて振替貯金へ御拂込下されば直に雜誌を發送致します。

◎一册郵税共金拾一錢　◎六册前金郵税共六拾錢

◎拾二册同金壹圓貳拾錢　◎郵券代用一割增



第十一卷第八號



香雪

うるほひ

人は誰れでもである。ましてや柔い子供の心を友とする我等にとりては、絶えず心の『うるほひ』がなくてはならぬ。燥いた、涸れた、かさ〳〵した心は子供の相手となるに適當のものではない。しかも我等の心はまたしても、此の『うるほひ』が失せ易い。事務に忙しいものは、つい〳〵機械の樣な心になつて、摩りへらされた革の樣に粗れて來る。研究々々と、餘りにその方に熱するものは、日盛の街を馳けあるく犬の咽の樣にいら〳〵しい心になり易い。まして、我慾にあせるものはそうした心は共に子供のよき友でない。

此の頃の夕べ曉のうれしさは、うるほひある天地のうれしさである。一日の焔くる暑さに、疲れ果て倦んじつくした人の心のみか、草にも木にも蘇きかへるうれしさは夕べの『うるほひ』である。起きぬけの庭

石つめたく、ふつくりと露をぶくんだ垣の朝顔、さては見なれた小草雜木にも、心ゆくうれしさは曉の『うるほひ』である。『うるほひ』ばかりにこそ夏の人は活きてゆく。

涸れ燥いた革に罅裂の入り易い樣に、涸れ燥いた心に傷が出來易い。先づがさ〳〵と氣短になる。物事はしやぎ切つて沁々とした興味がなくなる。斯うした心から、つい、すげない物言ひ振りも起り易い。つれない態度も起り易い。われにたゞ一滴の『うるほひ』だにあらば、おのずからなる優しさも湧かうものを。

○うるゝ〳〵しい子供の心の、ふつくらとした處は其の滋味である、潤味にある。いはゞしつとりとした朝の花の樣に、漂ふ如き夕の星の樣に、『うるほひ』多き美しさである。新らしいものには皆此の『うるほひ』がある。清いものには皆此の『うるほひ』がある。さなきだに陳り易く、穢れ易く、『うるほひ』の失せ易い子供の心を、われ等の燥きて粗き無情から少しでも早く涸らしては濟まぬ。

夜の間に世界がうるほふ樣に、人の心も憩ひから『うるほひ』が出る。憩ひとは必ずしも業を休むといふことのみではない。勝れだ人は、手足、頭腦の忙しい中にも心の憩ひ、心の『うるほひ』を絶えず蓄へることが出來る。つまり心の餘裕である。併し平凡の我々には、矢張り多少の休みを機會として憩ひ出來る。其憩ひから、思ひもよらぬ『うるほひ』が心に出來る。その『うるほひ』から、我れ相應の美も出る、善も出る。丁度砂埃干きつた巷に夕立のした後の樣に、丁度泥土きたない渚に潮の滿ちた樣に、いはゞ心の世界が一變する。

○折角の此の夏休み、人いろ〳〵に最善の利用法の多い中にも、兎に角くわれ等は此の『うるほひ』の恢復と蓄積がし度いと思ふ。高き山、清き流に、つきせぬ自然の『うるほひ』を汲むもよからふ。古今東西の君子哲人に就て、その豐なる心の『うるほひ』を學ぶもよかろう。所謂體ゆるやかに心ひろく、『うるほひ』多き朝夕を重ねて、九月再び子供等に會ふ時、『先生は、夏前よりも百倍やさしくなられた』と、子供心に感じて貰ひ度ひと思ふ。

異常兒童の話

ドクトル　富士川　游

（フレーベル會常集會講演速記）

唯今御紹介を請けました富士川でございます。先達つて倉橋さんから、何か此會で話をするやうにといふ話でありましたが、教育上のことにつきましては別段に取り立てゝ御話を致すといふ材料も持つて居りませんので、子供の身體のことに就て、何か御話を致して宜しいならば罷り出ませうと申しますと、それでも宜しいといふ話で、異常の子供の精神の有樣が、普通の子供と違つて居る。其子供に付て概略をしませうといふ、御約束をして居つたのです。極く短かく、又極く專門に亙りませぬで、纏つた所を御話して見たいと思ひます。

教育を專門として御居でになりまする御方には子供の中に、精神が當り前でない。即ち普通と違つた者が澤山あるといふことは御認めになつて居ることであらうと思ふ。其精神が、當り前と變つて居りますといふても、專門の學問、醫學の中でも精神病理學、或は神經病理學といふやうな、專門の學問からして、詳しく檢査をして見ますと、中に色々澤山な種類がある。唯だ一通り變つて居るとやらに見えても、實際は、さう唯だ一通りの異常ばかりでなしに、その中に色々の種類があるのであります。それで夫れを、實際の目的からして、どういふ風に區別し分類すれば宜からうかといふ事になりまして、それに就て色々の說が出、又諸家の研究が出ましたが、しかしまだ纏つた說はないのでございます。我國にも、それに關して二三の書物が出て居りますけれども、無論纏つたものではありませぬ。それで皆樣が一つの書物を御覽になりまして、それから他の書物を御覽になれば、全く違つたことか書いてある場合がある。今は故人になりました大村仁太郎氏が、兒童矯弊論といふ本を出して居られますが、これは獨逸のショルツといふ人が、餘程前に書きました本に據

られたやうであります。

それから乙竹さんの低能兒教育法といふものがある。これは瑞西のドモオアといふ人の書物に基いたものであります。

それから私共が吳、三宅の兩博士と一處に書きました、教育病理學といふ本は大體コッホといふ精神病の專門の學者の著述に據つたのであります、榊博士の著述も、大體に於て同樣であります。それで、今日まで我邦に行はれて居る異常兒童に關する著述は、何れも獨逸の醫者の書きましたものに據つたのであります。しかし、本家の獨逸にも今日まだ、この問題に就て纏つたものはないのであります。

それで私が御話しますのは、固より私の專門の方から申すのでありまして、實際に子供を御取扱になる御方、卽ち教育の實際に、御關係になつて御居でになる御方の御考とは、多少違ふかも知れません。これは豫め御斷りして置かねばならぬのであります。先づそれを御斷りして置いて、それから今日まで研究を致しました所を、成るべく專門に亙りませんで簡單に御話申したいと思ひます

子供の精神狀態は、無論身體と離れて別にあるものではないのでありますが、重に精神のことを論ずる爲に、精神の方面のみを引拔てお話致すのであります。古からの心理學の言葉で云へば、人間の精神作用は三つに別けるのでありますが、私は今それを智力と性格との二つに分けて、さうして此性格の方を、感情と意志とに分ける。これまで色々の人が色々の別げ方をしてやつて見ましても、どうしても實際の應用に便益が少いといふ事から諸家の意見が纏らぬのであります。

それで私はこれを感情の異常、意志の異常、この二つを引繰るめて、性格の異常、それから智力の異常とするのであります。異常といふ事は分り切つたことで、尋常と異つて、尋常から外れて、上の者も、下の者もある。これが大體の論であ

ります。それを少し詳しく申しますと、第一感情の異常、どういう風に變るかといふのに、非常に感情が發揚をして來る。又はこれに反して感情が遲鈍になる。遲鈍となるのは病氣でありますが、感情の發揚をしたものは神經質と云ふ性格を顯はして來ます。神經質とはどう云ふ風なものであるかといふに、チョット説明は仕悪いが、實際世の中に多くあるものであります。普通の人であれば何んでもない事が、其人に於ては非常に恐ろしく感ぜられる。普通の人であれば、何んでもない事が恐ろしい。學校の生徒が自殺するとかいふのは、他に原因もありますが、大抵は神經質の子供であります。普通の子供なれば罰を食つた位なことで自殺するものではない。此神經質のことは、醫學を專門にした者の診斷を經なければならぬ。しかし、神經質となる原因は、教育の方と關係があることであるから、心得て置いて載きたい。

神經質を起す原因は第一疾病意識といふものである。疾病意識といふのは、たとへば親が子供を非常に丈夫にしたいといふ考へで、少し子供が病氣をすると直に藥を飲ませる。冷水摩擦をさしたり、あれやこれやと無暗に治術を施す。頻りに豫防法を講じて心配する。さういう風にすると、子供の精神に疾病意識が出來て、それが爲に遂に感情の發揚を起して來て神經質になる。これが大變に多い。幼稚園の子供の中にも大分この類のものはあらうと思ひますが、現に小學校の子供には大分これがある。少し頭が痛いといふと、何んでもないのに、御母さんが心配して、それ御醫者さんそれ御藥と喧く、其次には頭が本統に痛くなる。即ち神經質になる。第二は名譽心の亢盛、學校の成績を一番にしよう二番にしよう、優等生にしようと、大勢かゝつて以て小供の名譽心を挑發するために感情の發揚を起して神經質になる。それから、日本では無いことでありませうが、第三が飲酒が原因になる。全體精神異常になり易い子供は、

酒に大變に弱い。醫者の言葉で、飲酒不堪と言つて居りますが、普通の人は何ともない位の量の酒に非常に醉ふ。こういふ風の場合には酒が神經質の原因をなすことがあります。其次には學科の過度で、ヒドクむつかしい事でない限り、精神の普通の者は、少し位學科が重いと云つて、それが爲に直ぐ神經質にはならないのでありますが、素因のあるものには、これも矢張神經質を起こす原因になる。

第二意志の異常、狹い意味の異常性格、或は病的性格、チョット御斷りして置きますが、普通の性格の異常、即ち精神狀態が普通であつて、それに起る所の異常は別であります。今お話致すのは病的の性格で、性格が病的の變化を起したのであります。この性格の異常は無論病氣から來るのでありますが、その一番目はヒステリー性の性格でこれは子供に多いものであります。ヒステリーとは一體どう云ふ病氣かといふに、これは生れ付あるのでありまして、詰り前の代、兩親から貰つて來た病氣であつて、自分の考には何んにもないことが、これが身體に觸る。自分の考にはハッキリ出て來ない考が、それが身體に觸る。例を云ふと何處か腹が痛いといふやうな事が十分意識には上つて來ない前に直ぐ腹が痛くなる。これは親から讓つて貰つて居る病氣であつて、少し感情が變動すると、直ぐ身體に障碍が出て來る。眼が見へないと思ふと、實際見へないのではないけれども其人には見へない。何處が痲痺れると思ふと、實際は痲痺れて居なくとも、其人には痲痺れた感覺がする。何等の感情が明に意識に上つて來ないと直ぐ身體に出て來る。でありますから、歩ける身體でも、歩けないと意識すれば、實際に歩けなくなる。それがヒドクなると、顏筋が釣れたり、目がつれたりする。殊に是は男より女に多いのです大きくなりますと、想像力が非常に強くなつて、何んでもないことに非常に想像を強くする。其結

果は嘘をいふ、病的に嘘をいふやうになる。これは子供或は婦人の或部分には隨分あるのであります。嘘にも色々ありますけれども、實際記憶を間違へて言ふのではない。想像力を逞ふして、殊に人の弱點を拾ひ上げて、それをやかましくいふ。善惡に拘はらず非常に惡口をいふやうな事がある詰り弱い感じがすぐ身體の中に現はれると同じやうに、精神にも斯ういふ風に現はれて來る。又何體ともなくづう〳〵出て歩く、目的なしに彷徨する。自分も何處に行くか知らないでブラ〳〵行つてしまふことなどもあります。それが高じると精神病になつて來る。

其次には癲癇といふ病氣になつて、性格が變つて來る。癲癇の重いものはヒドイ痙攣が起きて、口から泡沫を吹て、ヒックリカヘルのでありますが、そういふヒドイのでなしに、不意に顏色が蒼くなつて身體が震へたりする位のことがある。これも矢張り一種の癲癇であります。專門の醫者が見れば、癲癇といふことは直ぐ分る。この場合には顏の色が蒼くなつたり、頭が後ろの方に段々行つて、絶えず手が震へるといふ風になつて來る。さう云ふ子供は行儀が正しくて、物事が大變几帳面で、學校の道具でも何んでも鄭寧に整理して置く、何でも物事を嚴格にしないでは濟まぬといふ風になる。其變りナカ〳〵我慢が強くて、强情でナカ〳〵人の言ふ事を聽かない。それから物を集める癖がある。それからもう一つ前のヒステリー性の性格と違ふ所でありますが、此性格には自分を衒ふといふ風な事がある。それから酒を飲むと大變弱い。斯う云ふ性格の人が酒を飲むと身體に害をする。それからもう一は寢小便をする。十歲になつても十二歲になつても寢小便をやる。斯ういふ徵候のある子供は、專門に見なければ充分には分りませんけれども癲癇のものが多い。これが募ると到頭精神病になる。

其次には神經衰弱、神經衰弱性の異常性格が神

經衰弱といふ病氣のために現はれて來る。神經衰弱といふ病氣は、生れた時に矢張り親から傳はるのと、生れてから後にヒドク精神を働かした爲に來るのと二つある。生れてから後に精神を過度に動かした方のは癒りますけれども、生れ附の神經衰弱の方は癒らない。さうしてこれが神經衰弱の異常性格として現はれるのであります。其性格の極く著しいのは、どういふ風であるかと云へば、仕事をすると頭が痛くなる。それからある子供になると、學校に行くやうな時分から頭が痛くなる、さうして學校に行つて、課業が始まると順々痛くなる。晝頃になつて、學校の課業が濟む頃になつて漸々癒る。宅に歸る時分になるとスッカリ痛みが止まる、だから脇きからは學校に行くのが嫌いで、頭が痛いといふ風に見へる。さうではない、仕事をするといふ事に關係して痛みが付いて來るからチョット見分け惡いのであります。さうして頭が非常に散亂して、學校の成績も無論惡い。

それから强迫觀念がある。何でも非常に物事が恐ろしくなる。何か知らぬ恐ろしい、恐怖を感んずる。學校に行つても教室が怖い、教師が怖いといふやうな色々の恐怖が出て來る。殊に斯ういふ子供は、其恐怖が試驗前に出て來る。下調べも何も出來ない。ただぼんやりして居る子供が隨分澤山あるのであります。これもヒドクなりますと、矢張り神經衰弱性の積神病といふことになる性格であります。此性格の子供は、學校か幼稚園などでは能く氣を付けて見ると、袂を嚙むとか、爪の尖を嚙み切るなどの惡癖を持て居る子供が多いのであります。

其次には意志の薄弱で、これは病的に意志が弱くなるのであります。利口な子供で學問も能く出來るがしかし學問も余りしない。すれば出來るけれども、物事をするのに大變懶惰で、學校の成績なども面白くない。勉强すれば出來るけれども意志が弱い、物事をする意志が弱い、これが病的に

起きる。であります。

其次は悖德性の性格、これも病氣にあるのであります。智力が非常に劣つて居て、隨分人のものを取る。放火をする、物を投けるといふ風なものである。精神病でなしに身體に何か異常があつて悖德の性格を起こす。これには道德的觀念だけ欠けた場合もありますが、さうでなしに唯だ精神の發育の鈍いといふことに本づくものもありますこれはもう少し調べなければ、よくはわかりませぬが、さういふ性格で、道德的觀念の非常に變つた者があるのは事實であります。

其次は變質性の性格、變質性といふのは、身體及ひ精神が普通でない、定型でない、人並と違つて居る。その爲に一種の性格を起こして來るのであります。精神病では無論ない。しかし健康ではない、丁度健康と異常との間に屬する部分の者であります。此性格の者には身體にも色々の異常がある、頭の形が違つて居る、眼の形が違つて居る鼻、口色々の所が違つて居る、耳も形も色々違つて居る。或は耳の上に光つたやうなものがあつたり、角があつたりする。マカクス型の耳を持つたものもある。肋骨の骨も違つて居る。普通の人間には十二あつて、下の二つか動くけれども、三つ四つも動くといふような人がある。

それから乳が二つあるのが、普通であるのに、それがモット澤山あつて、四つあつたり六つあつたり十二あつたりする人がある。さうしてどの乳房からも乳汁の出るのもある。さういふ風に身體に色々違つた所がある。それを身體の變質徵候と云つて居りますが、一つや二つや身體に異常があつても、それ丈けで變質といふ譯けではない。耳が變つてる、眼が變つてるといふ風に澤山に集つて居なければ、變質といふ澤けではない。しかし、さういふ者にその變質性の性格が多いといふことは事實である。それで性格の異常といふことは、先づ大體御分りになつたと思ひます。

其次は智力の方の異常であります。智力の方の異常といふことも、これも色々種類があつて、一番ヒドイものは迚も教育は出來ぬもので、所謂白痴といふので有ますか白痴といふ者は、學校なり幼稚園なりに入れて教育は出來ない。其次のが魯鈍といふので有まして、これは幾らか物になるので有ます其上が痴愚といふので有ますしかしこの精神の薄弱には二種類ある。卽ち本統に智慧の足りないのと、假に智慧の足りないのと二つである。この假性の痴呆といふ事に就ては少し詳しく話したいことがありますけれども、時間がないのでありますから今日は極く略して御話して置きます。

生れてから、當り前の精神の機關が發達をして居ない、發達すべき精神が發達をして居ない、それで此白痴といふものは多くは出來るのです。それで痴呆は大抵は生れ付であります。ところが生れてから後に何等かの機會によりて、白痴呆になるといふことがある。殊に熱病などの爲めに痴呆になるものがある。是は極く僅がでありますがそういふのがある。痴呆は智力の衰へて居るのは無論でありますが、しかし、記憶力だけ非常に卓越したものがある。自痴院に這入て入るもの、中で自分で自分の着物を着ることも出來ず、靴をはくことも出來ぬもので、百七十年前、二百年前の一週の曜日を知つて居るものがある。

さういふ風な場合に記憶力が非常に發達して居る場合は、少くとも其兩親は決してこれを痴呆とは認めない。痴呆といふことには非常に不賛成であります。

東京の或所で以て、二錢銅貨を以て、火を點けて、澤山の家を燒いた不良少年がある。年は十二か何んぼうで、學校の教育は受けて居りませんか人と會つた時の挨拶なんかは出來るし、他の子供と較べて見ても、左程劣つて居るとは思はれなかつた。今日でもさういふ者があつた所で、チョット見た位ではナカ〳〵白痴呆とは思はれない。余

程詳しい鑑定をしなければならぬ。斯ういふものを痴呆と診斷することは、餘程六ケ敷事であらうと思ふ。それに假性の白痴といふものがある。これは一層むつかしくなる。假性の白痴といふのは身體に何か申分があつて、さうして智力が衰へて居る。例へば耳が聞へないとか、鼻の中に故障があるとか、鼻咽腔腺殖生の出來て居るとかいふことで、精神の狀態に異常を起こす。其爲め物を注意することが出來なくなる。注意の散漫といふことが非常に著しくなる。記憶力が少くなつて一つ事を長くやる事が出來ない。これをアゾロセキシイといふのであります。此の如く物事を一定に注意することの出來ないのは、學校の子供にも澤山あります。じつとしては居られないで騷ぐ、さう云ふ風な假性痴呆は重もに五官に觸りがあるので眞性の痴呆とは少しく違ふ。假性白痴は療治すれば癒る。本統の白痴といふものはこれは癒らぬ。

大體さういふ風に、精神の薄弱な者に付いて來るので、假性の者と、それから本統の者と、つまり其原因は同じことであります。

身體の方の徵候には、醫學の方でいふ刺戟性神經症狀、此症候は神經が動く、手足が上や下に動く。あの足を揚げる運動なんぞの時に、ピリピリと震るへるやうになる。俗にいふ『けんびき』、さういふ風になる。瞼が引付ける、顏を皺める、殊に幼稚園とか小學校の生徒には、注意して見ると斯ういふ神經衰弱の性格の者が澤山あり、又指の尖きが逆剝ける、さういふのが澤山ある。爪を嚙むのもある。これ等は皆な惡い徵候であります。

それから其次には、矢張り酒を飲むといふと大變弱い、害をする。それから此智力の異常ので前に御話をした癲癇といふもの、あれが非常に多い。

それで精神の異常の兒童、卽ち異常兒童は、これを取扱ふ人が早く見付けて、さうして相當の取扱ひをするといふことが大變必要なことであると思ふ。極くザット搔ひ撮んで申したのであります

けれども、私はこれで、異常の兒童といふものはこれで分ることゝ思ふ。

此別け方は唯だ私の考へでありまして、纏つたといふ程ではないのでありますけれども、先づさういふ風にやつた方が宜からうと思ひます。それに就てどうして異常兒童を見付けるか、これが實際の問題であります。

それならば、子供を取扱ふ人が、どうしてこの精神の異常を見付けるかといひますと、診斷の標準となるのは、大體は次の通りであります。

刺戟性薄弱、こういふ徵候が、一番先きに身體に出て來ると云ひましたが、どう云ふ事かといふと、神經が疲弊する、神經が薄弱になるのであります。普通の人の當り前の神經といふものは、チョットした事で疲弊するものではない。ところが少しのことで以て疲弊するといふことが異常な兒童に一番先きに現はれて來る。チョットした事で以て、其反應が非常に激しくなるのです。それが身體に色々現はれて來るのでありますから、先程申した通り、筋肉の運動障碍を一番先きに起こす身體が、じつとして居られない。此事位はと我慢してやるのが、當り前でありますけれども、我慢が出來なくなる。長い間の運動が出來ない、それから運動が確實でない、身體を動すことが確實に出來ない、其次には言葉が當り前に出來ない、或は吃るとかして當り前に出來ない、其次には文字を書く事が當り前に書けない、書く文字が不同に成り易く、又歪み易い、さういふことが一番先きに眼に付くのであります。

其次には精神の異常、精神の異常で一番先きに眼に付くのは性格が變つて來る。非常に我儘であるとか、强情であるとか、嘘を突くとか、人の惡口をいふとか、それから非常に物を誇大にする癖がある。さういふ事が著しく眼に付く。

それから其次には、感情が非常に過激になつて來て、怒つたり泣いたりする。刺戟性が薄弱にな

る。普通の人であれば、何んでもない事を恐れる小學校の生徒で、何か惡い事をした。それで罰をやる。罰をやる場合に、普通の子供ならば大變怖かつて居るのに、罰を受けて却つて喜んで居るといふ者がある。それは異常の性格の子供に多い。

それからして智力の劣つたもの、智力の異常の一番先きに現はれるのは、何事をするにも興味がない、興味を持つて遊ぶのが當り前であるのに、遊ぶにも興味がない、物をするにも興味がない。それから精神を集中することが出來ないとか、或は記憶することがむつかしい。一番眼印になるのは、被影響性が非常に強いことである。人からして何かされると直ぐ其通りになる。心理學の言葉でいふと暗示といふ。暗示に直ぐ乘る、暗示を與へると其通りになる。被影響性が非常に強い、異常兒童は智力の關係を以て、非常に性格が變るのは、特有性である。チョットした事でも、非常に影響を受ける。人が首を縊つて死ぬると直ぐ眞似る、泥棒をすると直ぐ泥棒をする。或る小學校の生徒が講談を聽きに行つて泥棒の若い時の話を聞いた。何んでも八つか九つかの時に、人と喧嘩をして人を殺した。それが後に偉い者になつた所がそれから刀を持ち出して、人と喧嘩をして喜んで居たといふ話がある。さういふ風で被影響性が非常に強いのであります。普通の人ならば影響を受けるのも、それ程ではないのでありますが、それが著しく眼に付くのであります。大體さういふ風な事でありますが、モット具體的に病氣のことに就て御話をすると、日本では澤山ない例でありますが、西洋の子供には澤山ある舞踏病といふのがある。身體が舞踏をするやうに動くといふのがある。字を書かせると字が妙な具合になつて、手が震へる。斯ういふ病氣が多い、ヒステリーの時に申しましたが、ヒステリーの病氣のものは、身體を修飾したがる。體裁を飾りたがる。ヒステリーの性格を有つて居るものとは、少し變つた性格

で、矢張り修飾をやりたがる。それから文字を書くと、前にも云つたやうに、大字になつたり小字になつたり、一直線にならずに歪んだりする。これは智力の劣つた白痴の者にあるばかりでなく、精神の疲勞した場合に、これが出て來るのです。字が亂れたりなんかするのは、卽ち精神の疲勞した徵候であります。それから書いた字が汚なく、誤字が多くて非常に見苦い。あれも智力の劣つた證據になる。無論これは結果から申したのであります。

それから前にチヨツト申した癲癇であります。癲癇は卒然、顏色が蒼くなつて、眼が引付けるやうになつて、沈つとして頭が森々、一歩一歩に後ろの方に傾く、引付ける。記憶力は非常に劣つて居る。さういふ風なのは多く癲癇である。

それから此癲癇とも限りませんけれども、舞踏病でもさうでありますが、ヒステリーでも何んでもさうであるが、物を問ふて、其問題に對して答をするに、非常に苦痛を感んずる。返答が直ぐに出て來ないでモヂ〳〵して居る。先生などはそれを怒つて叱かる、叱かると一層惡くなつて來る。さういふ性格がある。これ等は矢張り神經の弱い詰り精神の薄弱から來るのであります。

それから顏でありますが、顏を持つて、異常の兒童であるとか、病氣の子供であるとかいふ風なことを見分けることは出來ない。これに就ては罪人などは一種の顏をして居ると、色々の學者の說もありますけれども、これは、他に原因があるので少し問題が違ふのであります。斯ういふ風な顏がどう、さういふ風な顏がかうといふことはない。顏丈を以て判斷することは出來ない。

それから醫學の專門の智識がないと、無論詳しいことは分りませぬけれども、或る病氣によつては、御取扱の場合に注意をして戴けば分るのがある。例へば百日咳、あの病氣は、晝は何んともなくつて、夜になつて發作を起こす。母親も知らな

い位である。あの顔は違ふのです。顔がムツト膨れて、下唇が肥つて、輕い水膨れになる。殊に上眼瞼が下がる。さういふ子供があつたら、醫者に見て貰ふことが第一です。

それからもう一つは、前に申した假性痴呆でありますが、これは、前額が低くくて、鼻がヒヨロ〳〵動く、鼻と口との境の鼻唇が下がつて、口が明いて居る。下顎が下に下かりたがる。口を明けると非常に齒並が惡い、眠ると鼾をかく、こんな徵候の子供は智力の異常が多い、斯ういふことも御承知になつて居れば、實際に御便利であらうと思ひます。これ以上種々御話致したいこともありますけれども、大分時間も長くなつたやうでありますから、これで御免を蒙ります。（終）

蓮葉のにごりに染まぬ心もて
何をか露を玉とあざむく　（僧正遍照）

事足らぬことな恨みそ鴨のはぎ
短かけれども瀬に浮ぶなり　（鴨長明）

子供の色彩感覺に就いて（下）

菅原敎造

十二、ウインチ氏の實驗

前號では色の感覺と、色の名との發達に就いて、いろ〳〵學說を紹介しましたから、今度は最近の研究者ウインチ氏（W. H. Winch）が英國に於ける所々の幼稚園で實驗した結果を紹介しやうと思ふ。

此の實驗を行つた學校では、鞠、「玉とをし」といふやうな着色した器具を用ひて、色名の敎育を授け、且つ其の色は各學校を通じて餘り違がなく、又敎師が色の名を敎授する時に、總ての色の名を公平に敎へて居るのであるから、兒童は自分の好む色だけではなく、總の色名に就いて敎育を受けて居る譯である、故に斯う云ふ公平な敎育を受けた兒童に就いて、色名の實驗を行ふことが出來たのは、實驗者に取つては非常な幸と云ふべきで、

而も其の實驗は各二回を重ねたのであるから、此の結果から推して、感覺の方の順序を考へることが出來やうと思ふ。尚此の實驗には次に掲げる二の法則が定まつて居るのである。

（一）器物たる着色の鞠は赤、樺、黄、綠、青、薔薇の順序に、又「玉とをし」は白、黑、赤、琥珀、綠、青の順序に配置し、或る場合には此れと反對の順序に配置すること。

（二）鞠と「玉とをし」とは其の色彩と明さとが、各異つて居ること。

（三）實驗は各兒童に就いて、個々別々に行ひ、第一回の實驗が終つた後、暫く間を置いて次の實驗を行ふこと。

十三、第一回の實驗

最初の實驗は三歲から四歲迄の七人の兒童に施したもので、其の學校では總體に識別の力が乏しく其の中で三人は僅に赤と黑の二語、一人は青と白の二語、一人は赤、黑、青の三語、一人は赤、黄、青、白の四語を知つて居たに過ぎず、此の實驗は極めて不結果に終つたのである。

十四、第二回の實驗

第二回の學校は前の學校よりは市街に接近した場所で、其の周圍に色彩に乏しく、兒童の視覺を刺戟する物が少かつた。最初に實驗した兒童は三歲一ケ月から十ケ月迄の年齡で、其の中の一人は實驗者の與へた色名の出問を理解することが出來ず又或る色に對しては單に「色」と答へ、次に他の色を示すと「違つた色」と答へた子供もあつた、E、Sといふ子供は單に「色」と答へた場合が二度、其の他の色には皆「黑」と答へ、F、Mといふ女兒は青色を見て、惹き付けらるゝやうに立ち上つた後に、二回とも彼女獨得の色名「E」と答へ、綠を「空」と答へ、他の三人の子供は總の色を「色」若しくは「色物」と答へたに過ぎない。

次の兒童は四年二ケ月から九ケ月迄の年齡で、其の中で一番年長の子供すらも單に「色」と呼んだこ

とが二三回に止まらなかつた。

子供が或る色を呼ぶ場合に、單に「色」といふ言葉を用ふることが、何故斯程に多いのであらうか。思ふに此の場合の「色」と云ふ言葉の中には赤、青緑、樺といふやうに明に識別されて居る個々の色が含まれて居るものであつて、子供は其の色の名を知らない爲めに、單に「色」と答へるのであると見るのが正當であると思ふ、若し此れが事實であるとしたならば、感覺の方の力が色の名よりも先きに發達して居ると云はなければならぬ。

十五、第三回第四回の實驗

第三回に實驗した學校は前の二校に比べて、其の周圍の社會が遙に上級であつたが、然し實驗を施すに適當な兒童を得る事が困難で、辛じて三歳五ケ月の子供と、四歳になる四人の子供を得た。其の中でK、Sといふ子供は「色」と呼んだことが一度、青と白の名を用ひたのがP、Sといふ女兒一人で、他の兒童は明かに言ひ現はすことは出來なかつたけれども、少くとも四個以上の色名を持つて居たことは事實であると實驗者は云つて居る。

第四回目の學校は、喧噪なる街路の附近に建つて色彩に乏しく、且つ其の周圍の空氣が陰鬱であつた。A、Nといふ子供は總の色を漫然「青」と呼んだ、これは恐らく「色」と云ふ意味で「青」の言葉を使つたものと思はれる。そして此の學校でも不思議にも「色」といふ言葉を用ひた子供は一人もなく又第二回の實驗の時に琥珀色及び緑を「草」と呼んだ子供もあり、又G、Cと云ふ子供は赤、白、黑の三の名を知つて居たに過ぎなかつたが、一般から云ふと此の學校の兒童は比較的色の名の知識が進んで居た方であると云ふことである。

十六、第五回第六回第七回の實驗

第五回目の學校は比較的上流社會の區域に建つて居て、而も公園の附近であつた。其の爲めに子供の年齡は一は三歳から四歳、一は四歳から五歳迄の子供であつたにも拘らず、緑の色名が著しく

發達して居たといふことは、非常に注目すべき現象である。此の五人の子供の中で、一人の女兒は僅に赤の一語を知つて、これを總の色に當て嵌め又G、Bと云ふ子供は青、暗の二語、T、Hは綠黑、白の三語、E、Hは他より四五ケ月間も年長であつたのに、僅に青、黑、綠の三語を知つて居たに過ぎなかつた。此の實驗では前に云つたやうに綠の語が最も多く用ひられ、次に薔薇樺、褐色といふやうな色は年長になるに從つて發達して居たといふことは、非常に興味ある研究問題で、色彩感覺の發達と云ふものは、極めて些細な周圍の情況にすらも影響を受るものであることが明に理解されて來る。

第六回目の學校は倫敦の場末近くに建つて居たゞけに、其の周圍は未だ市區改正などの羅に遇はないで、空地の多い中に民家が疎に建つて居る場所であつた。此の學校の兒童は總體に色名の知識に乏しく、L、Pと云ふ子供の如きは他より七ケ月も年長であつたのに極く普通な色名たる「赤」の言葉すらも持たず、C、Nは赤の一語、W、Nは話が自由に出來る年輩であつたのに、種々違つた方法で試みたけれども、一の色名すらも知らなかつた、此の學校の實驗で最も奇異なる現象は、兒童の間に青と綠の言葉が全然缺けて居ることで此れ迄の實驗には全くと云ふべきである。

第七回の實驗を行つた學校は、前の二校よりは遙に上層の區域にある學校で、鬱々とした樹木や、多くの草花などが生ひ茂つた地に建つて居た。此の學校には全然色名を持たない子供もあり、又白黑、赤の三語を持つに過ぎない子供もあつたが、全體から云ふと、確に色名が進歩して居た方で、又、綠の名は先きの公園附近の學校と同樣に、他よりは遙に進んで居たと實驗者は云つて居る。

十七、此等の實驗に表はれた共通點

此れ等の實驗に表はれた色の名の發達は、餘程複雜な結果を表して居て、殆んど結論に惑ふやうな

狀態であるが、然し此れ等を綜合して、其の關係を考へて見ると、色の名の發達には自ら多くの共通點が見出されて來る、最も多く正確に言ひ規された色名を、最も早く發達した色名であるとして此の實驗の經果を調べて見ると、黑、白、赤の色名は同等に早く發達し、次に青、綠、黃、薔薇、樺と云ふ順序で發達して居るやうである。然し此の順序は同時に色彩感覺の發達の順序とすることが出來るか否やは元より疑問である。

十八、子供は何故色の名を誤るか

子供が色の名を云ひ表すときに、何故に彼のやうに間違をするのであるかといふのに就いて、プライエル氏は其の著「兒童精神」に次の如く論じて居る、「子供には正確な色彩感覺もあり、又總の色の名も知つて居るのであるが、唯此の二を正確に結び付ける能力に缺けて居る爲めに、自分勝手な色の名を別な色に當て嵌めるのである」と。此の理論は確に半面の眞であると云ふべきで、例へば赤といふ色の名と其色との關係が八ツキリ頭に纏つて居ないから、或は之れを綠と呼び、青と云ひ、黃と稱へるのである。今ウインチ氏が其の誤りを色分にした表に依ると、

赤	を	白	と呼びしもの 十三度
同		黑	同 八度
同		青	同 九度
同		綠	同 七度
同		黃	同 二度
青		白	同 十五度
同		黑	同 三度
同		赤	同 廿三度
同		綠	同 五度
同		黃	同 一度
綠		白	同 九度
同		黑	同 三度
同		赤	同 廿六度
同		青	同 十六度

同	黄同	三度
黄	白同	廿八度
同	黒同	四度
同	赤同	十六度
同	青同	八度
同	緑同	十度

十九　色の名の誤りとウインチ氏説

此の表に依ると黄色が白と誤まられたことが多く赤と誤られたことが少く、又往々青、緑と誤まらるゝのに黒と誤まらるゝことが最も少く、而も黄を青と誤つたことが八度であるのに、青を黄と誤つたことが僅に一度であることは少しく意外に感せられる。

緑を青と誤ることは吾々成人にしても往々有りさうなことで、暗い緑には殊にそれが多いと思はるゝ。然るに此の實驗では青と誤つたことが比較的少く、反つて赤と誤まられたことが廿六回、これに反して赤を緑と誤つたことが僅に七度である。

斯やうに總の色が赤と誤まられたことが最も多いことを見れば、失張り赤の名が一番先きに發達する色と思はるゝのである。

前に云つたやうに吾々成人にあつても、薔薇を青と、樺を黄と誤り、又夜にあつては緑を青と誤るといふことは極く普通なこと云つてよろしい。何故なれば此れ等は色は非常に似通つて見へるからである。然し赤を青、若しくは緑と誤り、緑を赤と誤る場合は先つないと云つてよい。然るに兒童にはこれがあることを見ると、此等の色は子供の目には似通つた色に見へ、進んで云へば之れに對して同一の色名を與ふることが何等の不都合も感せないのであつて、恰も植物學者ならざる吾々が、幾百種の草を單に「草」といふ單一の言葉を與へて、其の間に何等の差別も付けない場合が多いと同樣の理由であらう。

此れ等の實驗の結果に就いて考へると、子供の色彩感覺といふものは、最初は單に一の色であつて

それが赤、緑、黄、薔薇、樺といふ順序で段々に分れて發達するものであらうとウインチ氏は云つて居る、然し色名の發達が此の順序で發達するものだとしても、同樣に知覺の順序がこれであるとは云ひ得ないので、感覺の順序に就いてはウインチ氏は別に二三年前から熱心な研究を重ねて居らるゝといふことであるから、其の結果が發表されると、感覺の方の順序に就いて又種々な發見があらうと思はれる、其の機を得て再び諸君の爲めに研究の資を供し度いと思ふ。（完）

村雨の名殘涼しき夕風に
　吹かれて名のる山ほとゝぎす　（荷田在滿）

庭の面はまだかわかぬに夕立の
　空さりげなく澄める月哉　（源頼政）

風吹けば蓮の浮葉に玉みへて
　涼しくなりぬ日くらしの聲　（源俊頼）

園のをぐさ

後藤りん

○

大人用の草履の片々ばかり落ちて居たのを拾ひ來りて

「先生々々、こゝに人間の草履が一つありました」

（五年　男）

○

象の話をする時、此の獸は何んでも喰べる時、鼻が手やお箸の代りをする。けれども象はおはなをたらさないから奇麗でいゝが、皆さんの樣におはなをたらしては、汚くてお鼻で喰べることは出來ませんねゑ、といふと、

「それだつて、いゝやあ、僕は象でないんだから」

（四年三ヶ月　男）

○

ある日小春の唱歌をうたふ。その中に

とれとて赤きは柿よ
拾へと落つるは栗よ
樂し〳〵小春

といふ處にて、一齊に拍手をさせたるに、

「やー、可笑しいや。手をたゝけば拾つた栗が皆おつこちて仕舞わあ」

（四年　男）

○

お日樣やお月樣の話をして、お月樣はいつ出るものかと問へば、「夜出るもの」と直ぐ答ふ。それでは晝出るものは何でしようと問ふに、餘りに急で思ひ浮ばぬか、皆合點のゆかぬ氣の顏して答へずすると其の中の一人、黑板に　☆（日）○（月）の畫の描きあるを見て、

「晝出るのはお月樣が破けて出るんです」

（四年三ヶ月　男）

○

此の頃はお部屋（保育室）の机の空がなくなつて滿員ですから、もう誰れが來ても這入ることは出來ませんといひしに、

「それなら、今度誰れか來たら天井から革の紐をさげて、それにつかまらせればいゝでしよう」

（五年　男）

○

或る日薄紅梅の枝を澤山に貰ひて、早速各室の花瓶へ分ち活けると、幼兒の一人、先生々々、こんなに花を澤山どうするんですと聞く。すると傍に居し幼兒の直ぐそれに答へて曰く。

「ねえ、先生、鶯に貸してやるんですねえ」

（六年　男）

○

常に結膜炎にて眼を病める子、冬期休業後初めて登園の時も何となく眼を赤くはらして居たれば、お休み中に、お餅を澤山たべて遊んで許り居て、眼を洗ふのを忘れたんでしようと、からかひしに、

「そうじやない、あんまり御飯をこぼしたからさ」

○

△△さんの頬べたはふくれて居て、大層おいしそうですねえ、一つ喰べたいもんだ、といへば、

「お砂糖がついて居ないでもいゝこと」

（四年　男）

○

翌日又他の保姆が同じことを繰りかへして、お砂糖なんかついて居ないでもいゝからといふに、

「……今鹽をなめたばかり」　（右　同）

○

動物園ごっこをして、私は何に、誰れは何にと、いろ〳〵の獣になつて遊ぶ。一人の痩せて背の高き保姆、「わたしも這入りましよう。何にして呉れますかといひたるを、幼兒つく〳〵と其保姆の顔を見て、暫く考へた末、

「先生は、おばけになればいゝ」

（四年十ヶ月　男）

○

草履の鼻緒に白い布のまきつけてあるを見出して

「あら先生、此の草履は怪我をしたんですか」と問ふ。なぜですかと問ひかへすと、

「でも繃帶してるではありませんか」

（五年四ヶ月　女）

○

日頃は至極く眞面目な子である。或る日幼稚園の運動場から本校の窓を熟視して居しが、

「やあ學生が澤山居ること、二匹も三匹も四匹も」

（五年三ヶ月　男）

○

奴凧の手技をしながら、「上れ〳〵奴凧」と謠ひ初め、

廻る〳〵風軍
風よふけ〳〵車がまわる、
あまり廻ると目がまわる」

と謠ひ終ると、

「先生、風車にも目があるの？」

（四年九ヶ月　男）

○

散歩の歸り、馬が桶に首を突込んで秣草を喰べて居た。

「やあ、馬のお茶碗は大きいもんだなあ」

（五年二ヶ月　男）

○

お辨當の時、一人の幼兒が非常に御飯を急いで喰べて居た。そんなに急がないで、ゆつくり嚙んでたべる方が、よいお兒なんですよといふと、

「いゝえ、あんまり遲くつてもいけないの、中位がいゝの、おつ母さんがそう言つたのよ」

（五年七ヶ月　男）

○

幼兒の手藝品に名前をつける必要ありて、保姆が草書で奥村といふを書いた。すると其の子、暫くみつめ居しが、

「これは僕の字ではない、先生はうちのランプ（瓦斯燈のこと）を見てこないからいげないのだ」

（四年　男）

○

入學斯近く、もう五つ寢ると皆さんとお別れをしなければならないから、寫眞を撮りましよう。その日はなるべく休まずにお出なさいといゝしに、

「えゝ、そうして忘れそうになつた時出して見るんでしよう」

（六年二ヶ月　男）

○

お節句のお祝ひとて、各組殘らず一つになり、保姆も皆幼兒と共に煎豆をたべた。

「あら、いゝことぬえ、先生も姉妹仲よしで、皆さんと同じだわねえ」

（五年四ヶ月　女）

○

雪の爲に幼稚園の藤棚が倒れた、翌朝其側を通つて來て、

「先生々々、僕今ね、地震のそばを通つて來たの」

（三年七ヶ月　男）

○

雨の日、兄弟が揃ひの外套を着て歸る後姿を見て
「やあ、兄弟の樣だなあ」
といふ故、さうですとも、△△さんの兄さんですものと言ひしに、
「嘘ですよ、今喧嘩をしてたばかりだもの、兄弟じやありませんからね」　（四年二ヶ月　男）

○

靖國神社の池のほとりにあるシダレ櫻を見て、
「先生、これはヨダレ櫻でしよう」　（五年九ヶ月　男）

○

保姆の一人が下駄や草履の始末をして居るのを見て、
「先生はお女中さんなの」　（三年七ヶ月　男）

○

誰れでも仲よくするのが良いお兒なの、まして同じ幼稚園に來ていらつしやるのですもの。幼稚園ばかりじやない。日本人は皆さん、又世界中の人も皆さん仲よくしなくてはと話すと、
「そんなら乞食でも」　（五年三ヶ月　男）
「泥棒でも」　（六年　男）

○

幼兒を先生に、先生が生徒になつて幼稚園ごつこをする。君が代を唱ひましようとて△△のオルガンで合唱した。皆の態度が大層上出來ゆへ後にて讃めると
「先生々々、わたしのオルガンの足が一番うまかつたでしよう」　（五年九ヶ月　女）

○

二三人月謝を忘れて來た子があつたので注意すると、
「あゝ亦忘れた、寢ると忘れるからいけない」　（五年十ヶ月　男）

保姆がそれを聞きつけて、皆さんは肝腎な御用はお忘れなさるけれど、御飯をたべることは何故忘れなさらないのでしようといふと、

「それだつて、仕方がないや、生れた時から、そういふ癖がついて居るのだもの」

（六年二ヶ月　男）

○

戰爭ごつこで野戰病院が出來た。看護婦の幼兒が各病床を見舞ふ。やがて總指揮官の病床へ廻つて來た。其の大將に木綿の羽織のかけてあるを見て

「アラ、えらい大將でいらつしやるのだから、絹のお羽織をかけて上げなければいけないのだは」

（五年十ヶ月　女）

○

日比谷公園への遠足、保姆の手不足から一人で連れてゆく由を前から話して置いた。處が途中からいま一人加はることになつて、何時かあとからついて來るのを見出して、

「やあ先生が二人になつたから、西洋までもいかれるなあ」、

（六年　男）

○

入園したばかりに、貴方は菊枝ちやんとおつしやるのですかと顏をのぞいた。すると意外、

「あーら、いやな先生だこと、わたしは菊枝ぢやんじやなくつてよ、菊枝さんだわ」

（四年十ヶ月　女）

○

日が照つて居て雨がふる。△ちやん窓から首を出して、

「あら、いやーだ、お天氣の雨がふつてる。おてんとう樣隨分老碌だわねー」（五年三ヶ月　女）

かゝる材料をかく多く集めるは容易ならぬ根氣でありますが併しその興味と有益は、そのお骨折りに充分酬ゐると思ひます。後藤さんの勞を多とすると共に、廣く諸方の方々からも此の種の材料を澤山寄せられんことを希望致します。その中に斯かる材料が如何に幼兒研究上に用ゐられるかに就てお話し度いと思つて居ます。（編者）

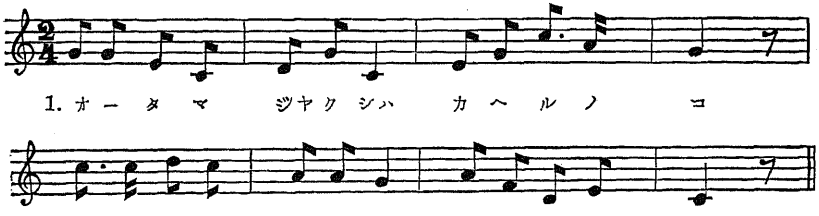
保育の實際

○唱歌紹介

（甲賀ふじ子氏）

フレベル會夏期講習會に於て甲賀講師の教授せられたるものを誌上にも頂だいしました。（編者）

おたまじやくし



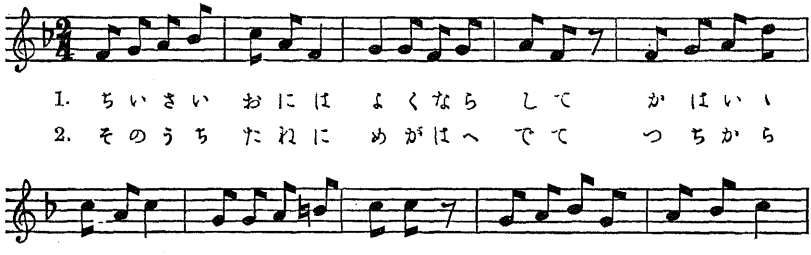
二、いつも〳〵も、
　およいでる、
　あたまばまるく、
　をはながい。

三、あしがないのに、
　はしつこい、
　れてゐるうちに、
　しやくひませう。

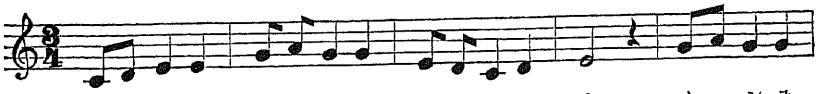
四、だいじにそだてい、
　やりませう、
　はやくてあしが、
　はへてこい。

五、かへるになつたら、
　うたうたへ、
　かへるになつたら、
　クワワ〳〵〳〵〳〵。

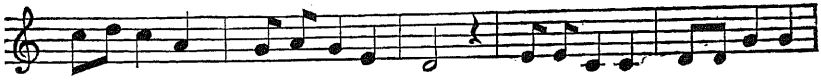
小さいおには



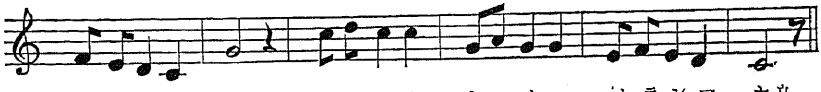
いへつくり



1. コーノ　オヤマヲ　キリヒラキ　イーシヲ
2. なーきな　いしなば　すゑつけて　つーいて



ハコビテ　イシガケヲ　ツミアゲ　ツミアゲ
かためて　しつかりと　どだいが　できたら



ツミアゲテ　ツーチヲ　キレイニ　ナラシマセウ
そのうへに　いくづも　ふーとい　はしらたて

三、

かもゐやしきゐを
くみあはせ、
屋根をこしらへ
かべぬりて、
たゝみやふすまを
あたらしく、
入れてお家が
出來ました。

四、

ひろいおにはの
あちこちに、
お花をいろ〳〵
うえました、
みなさんお客に
來て頂戴、
お花やおにはを
見せませう。

机邊だより

倉橋惣三

スタンレーホール氏の此の論文は十年程前のもので新らしいものではありません。併しその堂々たる所論は今尚我國の幼稚園の爲に不尠參考になると信じ、玆に數號に亙つて委しく御紹介することにしました。

○幼稚園の改良

（スタンレーホール氏）

序論

幼稚園の發達は極めて近代の事に屬して居るのであります。他の學校教育は色々の方面から研究せられ、種々の異つた學說や學派が現はれて根本問題を討議し、又之れを實際に應用し研究しました結果、順次發達して來たのでありますが、獨り幼稚園のみは全く舊態を保守して、フレーベルの唱へた理論と、實際に行つた所とを唯一の目的として來たのであります。然るに最近に至りまして、兒童研究が開け、又發達心理學が研究せられるやうになり、其の上兒童の身體的發達を衞生學の方面から研究するやうになりました結果、幼稚園に關する問題が八釜敷くなつたので有ます。卽ち二派に分れて、一方は今日フレーベル主義などを墨守して居てはならない、大に研究を進めて幼稚園の改革を計らねばならないと云ひ、他方は之れに反して何處までもフレーベル主義の權威を認めて行かうとして、此れ迄行はれた種々の新研究も只此の主義を布衍し、確證する丈けに止まつた、所謂新方法も僅か一部分の事柄に就いては有効であらうが、然し之れを以てフレーベルが實驗し證明した方法を排斥することは出來ない、何處までも根本主義としては此れを採らねばならぬと固執するのであります。

私は今此の二主義に就いて其の是非を定めやうとするのではない、私の目的とする所は、斯る議論を引き起こし、斯る議論の奥底に横はつて居る根

本問題に就いて、之れを近世心理學の發達に照して研究したいと思ふのであります。充分に論ずることは出來ないのでありますが、大體の筋道丈けは明かにしやうと思ひます。便宜の爲め問題を三つに分けまして、

第一、には幼稚園の奥底に横はつて居る哲學上及び教育上の原理を論じ。

第二、には遊戯のことを論じ。

第三、には幼稚園の衛生に就いて論じやうと思ふのであります。

第一、フレーベルの哲學的原理

フレーベルは十九世紀が生み出した教育者の中で最も偉大な教育者、教育的天才であることは今日少しも疑ひない所であります。彼れ以前にあつても幼兒の教育の大切なことを説いたものは多くあつたのでありますが、彼れほど強く、彼れほど明かに之れを認めたものはないのであります、ペスタロッヂは兒童の衝動を遊戯に利用することを説いたのでありますが、彼れは社會上、及び道德上の改革に熱注致しました餘り、此れを單に職業と云ふ方面からのみ觀て居りました。ルーソーも自由な活動、自由な遊戯の必要を説きましたが、彼れは社會的關係を無視した爲めに、兒童の本能を統御し、訓練することの必要に思ひ到らなかつた、獨りフレーベルは純粹に教育と云ふ着眼點から幼兒の遊戯衝動を訓練し、發達せしめねばならないことを深く感じて、其れが爲めに極めて根底の深い組織的な方法を案出したので、其れがかの有名な恩物であります。此れから私は彼れの幼兒教育法の根底に横つて居る哲學的原理の説明と其の批評とを致さうと思ひます。

先づ第一に吟味せなければならぬことは、彼れが二十の恩物を案出するに至つた目的は何ぞやと云ふことであります。此れには二つの目的がある。第一は兩親及び教師をして幼兒の教育と云ふことに深い興味を持たせ、兼ねて彼等自身にも亦精神

修養の好機會を與へやうと云ふことで、第二は幼兒其のもの、精神を開發々達せしめやうとするのであります。フレーベルは兩親をして一層兒童に接觸させねばならない、彼等は兒童と共に遊び、共に住まねばならないことを唱へ、而して兩親と幼兒との興味の一致調和を計り、其の居中調停物として恩物を用ひたのである。然しながら此の興味の一致と云ふことに付異議があらうと思ふ、幼兒の興味は幼兒に獨特なもので、大人が其れに同することは出來ない、フレーベルは大人は幼兒の成長したもので、幼兒は大人の小さなものに過ぎないと云ひますが、大人と幼兒との差は單に大小濃淡の差ではない、程度の差ではなくて、種類の差であるのであります。

フレーベルが恩物の構成に就いては、其れを指導する一つの大きな原理が其の中にあるのである。其れは卽ち彼れの哲學的原理で、此の原理に從つて彼れは恩物を案出し、其の排列法を定めたのであります、彼れの哲學はフイヒテやシエリングの同一哲學を取り入れたもので、之れを一言に云ひますると、宇宙には一つの大きな法則があつて、其れが森羅萬象を支配して居る。其れは卽ち『發達の法則』で、此の發達の法則が、草木土石、禽獸蟲魚から吾々人間の自覺的活動までも一切支配統御して居る、此の萬物を包含し支配して居る法則は必然的に永久普遍の統一體、卽ち神に其の根據を置いて居るといふのである。そして此の法則に從ふと如何なる物でも、如何なる狀態でも、如何なる性質でも、必ず其れに反對するものが存在して居る、例へば物質に對しては精神、自我に對しては非我があるやうなものである。然し此の二つの反對せるものは何時までも反對として殘つて居るのではない、其の反對性を包含し調和する統一體が其の上にあるのである。そして其の統一體にも亦反對性のものがあつて、其の上の統一體が又其れを包含し調和する、其れ故此處に二つの反

對物を連結する法則がなければならぬ、斯くして彼れの所謂『連結の法則』が生じたのである、かういふと甚だ六ケ敷なるのでありますが、彼れの所謂發達の法則は、論理學上で云ふ所の分析綜合の原理に外ならないのであります、以上述べた所から觀ればフレーベルが實物よりも法則を重んじ、其の結果形式論者となり、シンボリストとなつたのは自然の事であります。彼れは此の發達の法則を以て、教育上の根本原理となし、教育の柱(Steeken und Stab)と呼んで居るのであります。彼れの哲學上の見解を批評することは私の此の講演に取つて重い關係はないのであります、只彼れが此の『發達の法則』を教育上に如何に適用したか兒童の精神を訓練する材料の上に此の原理をどう用ひたかと云ふことを吟味すれば可いのであります。

フレーベルか恩物を連結的のもの、發達的のものとして案出し、排列するに就いては三つの要件を

滿足させやうと思つたのである。第一は幼兒の眼前に横はつて居る種々の事物は實に複雜雜多で、彼等の眼を引き、眩惑させるやうに出來て居る爲め、幼兒が其れに注意を奪はれ、精神を困亂させられないやうにしなげればならない。次に兒童の注意を物の内部に向けさせねばならない。第三には兒童の注意を自己意識の中に導き入れ、客觀的事物の中に自己の精神生活を觀取し得るやうにしなければならぬ。即ち此の三つの目的を達し得るやうに恩物を構成せねばならぬと云ふのであります。

フレーベルは熱心な自然研究者であります。自然物を汎く觀察し、此れを分類整理して科學的研究を施こすことを好んだのであります。其れ故幼兒は目前の木や石や花や鳥に自分の心を眩惑され、彼れより此れと注意を奪はれて、精神を混亂されることを恐れた、適當な方法を以て幼兒の經驗を制限し、少なくとも規整しなければならないと考

へた、即ち彼等の精神を刺激する無限の事物は能く整頓せられ、科學的にせられることを望んだのである、斯くして兒童と自然物との中間に第三のものを用ひて兩者の關係を鹽梅する必要を認め、此目的に資する第一のものとしてボールを撰んだのであります。ボールを以て恩物の中心となし根本となしたのである。

なぜボールを以て恩物の第一としたかと申しますると、ボールは其の形が圓くある、圓滿である、遍滿して居る姿であります、即ち宇宙の根本原理の形である。兒童をして早くから此の根本原理と云ふことに思ひ到らせることが最も大切であるとフレーベルは考へたのである。次に此のボールから球に進み、球から圓筒に進み、圓筒から他の立體に進み、斯くて彼れの恩物が組織構成せられるので、彼れは此の間に整然たる分拆綜合の原理を應用したのである、少なくとも此の原理に從つて遊戯材料を整列せんと努めたのである。斯くして易きより難きに、已知より未知に、單純から複雜に達せんとしたのである。

フレーベルは兒童が自然物の爲めに其の精神を眩惑せられ、注意を擾亂せられるのを恐れて恩物と云ふ第三者を採用したことは今日から之れを觀て贊成することが出來ないのである。第一兒童の精神は彼れの考へたやうに深い眠から突然覺めて、俄かに自然物の爲めに惑亂せられるといふやうなものでは無いのであります。まだ複雜な經驗を受け容れる丈けの素地がないのである。次に自然物と直接に接觸するといふことを除いては兒童の精神を開發することは甚だ困難である。自然物に接觸することを避けさせて、符號や模型で教育しやうとするは其の方法を誤つて居る。石や木や水や山を直接に觀、直接に接することが最も必要である。實物教授は幼兒に取つて極めて大切なのであります。

只今申上げました事と關聯して、私は最後にフレ

ーベルの論理法に就いて一言述べやうと思ひます前に述べましたやうに、幼兒の精神を訓練する材料を論理學上の分拆綜合の原理に從つて排列すると云ふことは、彼れの教育主義の根本を爲して居るのである。ボールは最も簡單なものを代表し、それより球、球から圓筒と順次論理的の關係を以て進んで居る。諸の恩物は分拆綜合の整然たる秩序を追ふて排列せられて居るのである。斯る排列法が教育上如何なる價値を持つて居るかと云ふことを問ふのは今日患の至りでありますが、三歳より六歳に至るまでの幼兒の神精が果して斯る論理的の秩序を以て實際に働くか、どうかと云ふことは充分之れを吟味する價値があらうと思ふのであります。

申すまでもなく論理學は觀念間の關係を規定する學問で、其の法則は實際の事物と多く關する所がないのであります、全く形式的のものであります。そこで三歳より六歳までの幼兒が果して能く斯る論理的綜合と分拆とを受け容れる能力があるでありませうか、論理的抽象的の考へ方は餘程成長して後發達するもので、此の年輩の兒童にあつては彼等の周圍の事物を見たり、聞いたり、嗅いだり觸れたりすることが其の全能力である。彼等は性質に依つて事物を連結するのではなく、同じ場所にあるとか、引續いて起つたとか云ふ時間と空間との關係に依つて物事を連結するのである。子供は實物から離れて色丈けを精神の中に收めて置くと云ふことは出來ない。之れは單に色のみではなく、數に付いても、形に就いても又は性質に就いても、實物から抽象して其れを認めることは出來ないのであります。論理的抽象的の能力を發達させることは適當な時期に於いては極めて大切なことでありますが、其の時期を誤つては益のない所か、却つて害になるのであります。

遊戯材料を撰擇し、排列するに二つの方法があります、其れは論理的の方法と、心理的の方法であ

る。此れは畫に就いて例を取ると能く明かになるのである、論理的の方法に從うと、畫は直線から殆めなければならない、直線が最も簡單で、總べての基礎となつて居るのである。一直線を引いたならば、次に反對の所に又一本の直線を引き終りに其れを結び付けるのが其の順序であります。然し心理的の方法、即ち自然的の方法に依ると決してさうではない、子供が始めて畫を書く時に直線を引くでせうか、決して直線は引きません。曲りくねつたものを引きます、若し直線が出來れば其れは全く偶然で、然も其れが彼れの意志に反いたものであります、幼兒は斯る直線とも曲線とも就かないものを引いて、彼れの周圍にある實物を寫さうとするのである。普通は人を描くもので、一個の圓に二本の線を引いて、其れで以て人が書けた積りで喜んで居るのであります。此れを以て觀てもフレーベルの論理的の方法に依つて組織構成せられた恩物が、幼兒の精神中に實際働らいて居る方法と大に異つて居ることが分るのであります。

子供の友一茶

倉橋生

一

「親のない子は何處でも知れる
　　爪を咥へて門に立つ」

三才にして母に逝かれて、一茶はその時から悲哀の人となつた。信濃の國芙蓉湖のほとり、柏原村の夕暮は、さなきだに山國の秋が冷い。その秋風の冷い門に、爪を咥へては獨り淋しく立つ、幼い一茶の姿が目に浮んで來る。一茶の幼名を彌太郎といふ。彼の有名な

　我と來て遊べや親のない雀

の句は、孤兒彌太郎が六才の折の切ない聲である一茶は後に、その頃のつらい思ひを追懷して書いて居る。

　親のない子は何處でも知れる、爪を咥へて門に立つと子供等に唄はるゝも心細く、大かたの人

交りもせず、うらの畠に、木萱など積みたる片陰に蹋りて、長の日を暮しぬ。我身ながら哀れなりけり。

柔いおさな心は、生みの母親の慈愛によつてこそ眞にはぐくまれる。そのはぐくみの懷を奪はれた孤兒の心の陰影は、生涯を通じて、消え難いものである。況して多感なる詩人の胸奥には、いつまで經ても此の淋しみが忘れられなかつた。それが折に觸れ物につけては句になつて出て居る。

鶯も親子つとめや梅の花

門かすぞ啼かずに遊べ雀の子

源氏三つのとし我も三つのとし母に棄てられたれど

孤の我は光らぬ螢かな

二

生母の懷を奪はれた孤兒は、たゞに受くべき愛を受けなかつたばかりではなかつた。世にも苛酷なる繼母の手に育てられて、幼い子供にあり得る限りの不幸を受けた。

「一年三百五十九日、目の腫れざることもなかりけり」

とは、順境の家庭に育つた幸福兒の到底察しもつかぬ悲慘である。宜なるかな自ら此の悲慘の味を沁々と味つて居る詩人の同情は、世の不幸なるまゝ子の上に、とめどない熱い思ひやりの涙となつて溢れて居る。

まゝつ子や納涼仕事に藁たゝく

まゝつ子や晝寢仕事に蚤拾ふ、

まゝつ子が一つ團扇の修覆かな、

若竹の子さへのがれぬ憂世かな、

また無駄に口あく鳥の子供かな。

○

昔大和國主田村に、むくつけき女ありて、まゝ子の咽を十日程ほしてより、飯を一椀見せびらかしていふやう、是をあの否地藏のたべたらんには、汝にもとらせんとあるに、まゝ子ひだる

さに堪へがたく、石佛の袖にすがりて、しかじかねがひけるに、不思議やな、石佛大口開いてむしや〳〵喰ひ給ふに、さすがのまゝ母の角もほつきり折れて、それより、我生める子とへだてなく、はごくみけりとなん。その地藏ぼさつ、今にありて、折々の供物絶えざりけり。

ぼた餅や藪の佛も春の風

○

高井郡六川郷六かはの里、山の神の森にて、栗三つ拾ひ來りて、庭の小隅に埋み置たりしに、つや〳〵と芽を出して嬉しげなりけるを、東隣にも、家に家をつくり足しぬるからに、月日の惠みとゝかず、雨露の潤ひうとければ、其の歳やをら一尺ばかり伸びげり。しかるに此の國のならひ、冬になれば、東より西より南より北より、家の大雪をひた落しに蓄しこむからに、恰も越の白山一夜に兀と漏出たるに等しく……

……やゝ卯月八日髮さけ虫の歌を剛に張る頃、山鶯の折知り顔になけば、雪の消え口より見るに、哀なるかな、栗の木は根際よりほきと折れて仕舞ひぬ。人ならば直に無常の烟と立昇るべきを、古根よりそろ〳〵青芽吹いて、辛うじて一尺ばかり伸びけるを、又前の如く、家の雪を落しこまれて、ほきりと折れ、年々折れ〳〵て、ことし七年の星霜を累ぬれど、花咲き實入る力もなく、されど此の世の縁つきざれば枯れも果てずして、生涯一尺許りにて、生きて居るといふ許りなるべし。我又さの通り梅の魁に生れながら、茨の遲生に地をせばめられつゝ鬼はゝ山の山おろしに、吹折られ〳〵して晴々しき世界に芽を出すは、一日もなく、ことし五十七年露の玉の緒の今まで切れざるも不思議なり。しかるにおのれが不運を、科なき草木に及ぼすことの不便なりけり。

撫子をまゝはゝ木々の日陰草

三

父としての一茶には三人の子供があつた。三人の愛子の父として、一茶は隨分子煩惱の詩人であつた。

こぞの五月生れたる子に一人
前の膳を据ゑて
這へ笑へ二つになるぞ今朝からは
片乳を握りながらに初笑ひ
蓬萊に南無々々といふ子供かな
小坊主が棒を引ても吉書かな
わんぱくが先づ手のひらに筆初め
今一つ雛の目をせよよい娘
末の子も別にねだりて蠶かな
三尺に足らぬ幟のお客かな
とつときに金太郎するや幟客
畫團扇をくしや〳〵にする童かな
子寶がきやら〳〵笑ふ稻火かな
其あとは子供の聲や鬼やらひ
我家の子供も鬼を追ひにけり
妹が子は餅負ふ程になりにけり
幼子や只三つでも年をとる

四

幼にして不幸の子であつた一茶は、長じて亦不幸の父であつた。愛妻の死はその不幸の第一であつた。亡妻に對して

小言いふ相手もあらばけふの月

の敦厚なる哀情を吐露して居る一茶は、殊にその遺子に對して、

おさな子や笑ふにつけて秋の暮
かたみ子や母が來るとて手をたゝく

なる、切實の哀憫を感じて居る。自ら孤兒の淋しさを味ふて居る身の、我愛子も亦同じ樣なる孤兒になつたと思ふ一茶の心情は察するに餘りあるのである。

第二の不幸は、心卑しき後妻が、此の大詩人の偉大を解し能はずして、すげなくも去つて行つたことである。流石の一茶も此の無情なる下劣なる愚

女に對しては、冷然たる態度に出づるの他なかつたが、哀れなるは遺された子供達である。子煩惱ではあつても、自らは子供の世話の行屆かない詩人の父は、是非なく幼兒を他人の養育に托した。然るに何の不幸ぞ、その子は所謂預り子の不幸を身に負ふて、痩せ衰へてついに死んだ。

なごしこや地藏菩薩のあとさきに

不幸なる父は斷腸の人となつた。その子煩惱詩は哀調を帶びざるを得ないのである。

陽炎や目につきまとふ笑ひ顏

みどり子が二七日の折の句である。我子が死んだとは思へないといふ、不幸な親の實情であらう。

子ありとや蓬の門の蓬餅

愛子を失ふた親が、子供のあるよその家庭を眺めた時の、何とも形容のしようのないやる瀨ない思ひは、斯うでもあらはすより他なからう。

行く雁や子と覺しきを先に立て

大勢の子を連れありく雀かな

鵜も親子鵜飼も親子二人かな

名月や膳へ這寄る子があらば

水いらぬ親子暮しや山の鹿

棹鹿も親子三人暮しかな

燕の子親子揃ふて歸りけり

五

子として母に疾くわかれ、父として子に先だゝれ親子の愛情を胸にのみ湛えて過ぎなければならなかつた詩人に、親子の愛情に對する切實なる詩の多いのは自然であらう。一茶句集を誦するもの、胸に響いて忘れられぬ名句の多くは、此の眞情の誦詠である。

雀子にものやる親も口を開く

寢せつけて子の洗濯や夏の月

母馬が番して飲ます清水かな

涼風のなく木へ縛る我子かな

母親や納涼がてらの針仕事

逃るなり紙魚が中にも親と子よ

放れ鵜が子のなく舟に戻りけり
子持鵜が大聲あげて戻りけり
人聲に子を引かくす女鹿かな
蚤のあと數へながらに添乳かな
泣くなとて母が踊るや門の月
澁いとこ母が喰ひけり山の柿
下冷の子と寢がはりて添乳かな
あかぎれをかくして母の夜伽かな
山寺や子に迷ふ親の衣配

六

親と子との情愛に限らず、子供に向つて注がれたやさしい一茶の同情を、實に遺憾なく發露して居る句の中、殊に心をひくものが四つある。其一つは

その薺ありたけ買はん娘の子

である。春の夕べの街に、いたいけな娘の子が、賣り殘した薺の荷を持ちあぐんで、しよんぼりと立つて居る樣が見える。そこへ通りかゝりの一茶翁の、旅に汚れた破れ衣の破れ笠の姿も見える。忙しい――いはゞ自分のことのみ考へて居る街の人達は、誰れとひり此可憐なる薺賣を顧るものもない。温い春のことゝて、そこらには樂しそうに戯れ遊んで居る子供達もあつたであらう。あゝ之れも亦人の子かと思ふと、一茶翁のやさしい胸は痛んで來た、その薺ありたけ買はん娘の子。たゞ十七字最よくその抑へ難い眞情を盡して居る。

それから

七歳の順禮ぶしや夕しぐれ
小座頭の追ひつめられし時雨かな

の二句にも、世に憐れな子供達の、はかない哀れさが沁々と胸にせまる。

朝霜やしかも子供のお花賣

之れは善光寺にこの實景であるらしい。あの大きな善光寺の大伽藍と冴えきつた霜の朝とを背景にして、小さい子供の花賣の姿が、小さく〳〵、尙々あはれに見えて來る。彼の有名な「雪の日やあ

れも人の子樽拾ひ」も、詩人が優情の發露には相違ないが、「あれも人の子」のいさゝか理詰がかつた月並調に折角のしんみりとした感じが殺がれる寧ろ一茶の此四つの句の、卒直にありのまゝの實景から胸の底までそゝりたとられる樣な哀音に若くべくもない。げに、小座頭の追ひつめられし時雨かな。その寒さうな小座頭の慄へ姿が目に浮いて來る。七才の順禮ぶしや夕しぐれ。おぼつかない順禮ぶしが、濕ひをもつた時雨の夕のうす暗がりから、かすかにあはれに聞えて來る。

七

一茶の生涯を外から見れば、奇嬌と飄逸の極、殆んど狂人に類する如きことさへあつたが、併しその內には尋常人の及びもやらぬ優しさを湛へて居た。規矩尋常の生涯を送るには、寧ろ餘りに情熱に充ち、同感に過ぎたのである。卽ちその風懷は一方には世の一切の權貴富貴を嘲笑する不羈の詩となり、一方には、淺薄陳腐なる世態のしかつめらしさを嘲つて、滑稽洒脫の詩となると共に、又一方には子供や、動物や、草木や、有情無情の弱者に對する親切切實の同情詩となるの兩極端（外見的）に陷つて居るのである。强者に對して强い詩人は、弱者に對して弱い詩人であつたのである弱者に對する充分なる同情を有し得る樣にその生涯を通じて弱者の苦味を嘗め盡した詩人であつたのである。外のことは暫く措く。少くも彼れが子供を詠ぜる詩に富み、殊に同情同感の哀調に富める點は、彼れの先天的多感と共に子供としての又子供に就ての不幸多かりし彼いの生涯の結果であつたのである。かくて我國の詩人の中で、其量に於て、その質に於て、兒童詩人の恐らく第一者たる一茶は、充分の尊敬と研究とを我等に要求するものである。

吹き來る風に任かせてへだてなき
海の心のひろくもあるかな　（頼三樹）

千葉縣

岡田貞子氏に告ぐ

先頃小生病中に頂戴致し候御手紙取込中紛失致し御宿所不明と相成り御返事差上兼候恐入候へども今一度御はがき頂戴致し度候

和田實